

「地域 SNS はまちづくりの次のステージを切り開くか・・・全国フォーラムに参加して」
未定稿 大阪市立大学大学院生活科学研究科 教授 藤田忍



熱気あふれる全体会 画：岡田藍 (注1)



ポスターセッション



交流会

【1. 熱かった兵庫県公館---550人の参加】（注2）

この8月31日に、神戸市の元町にある兵庫県公館において、「地域SNS全国フォーラム ～地域SNSが、地域を変える、社会を変える～」が開催された。主催は、兵庫県、財団法人地方自治情報センター、ひょうごふるさとづくり交流会議であり、全国からなんと550人が手弁当で参加した。今年の夏は暑かったが、この日の兵庫県公館に集まった参加者はひとときわ熱く燃えていた。

午前中から終日、各地の地域SNSの紹介コーナーがあり、午後には全体会（パネルディスカッション「地域SNSが、地域を変える、社会を変える」）、3つの分科会、交流会が開催された。また、その夜から次の日にかけて、姫路に泊まって世界遺産姫路城のお掃除体験とか、【登山&陶芸美術&温泉】など楽しいオプションイベントも開催され、主催者の意気込み、おもてなしの心が満載のフォーラムであった。

全体会および、各分科会の趣旨をプログラムより引用する。

全体会では、「21世紀の井戸端会議とも称される地域SNSなどの新しいコミュニケーションツールを活用することによって、地域がどうかわっていくのか、ひいては、日本社会がどうかわっていくのか、大局的な視点から議論する。」

第一分科会「地域SNSでコミュニティ活性化」では「兵庫県での取り組み事例の発表を中心に、地域SNSによるバーチャルなコミュニケーションとリアルな活動を連携させ、いかにして、地域づくり、コミュニティ活性化につなげていくかを考える。」

第二分科会「地域SNSを活用した地域間交流」では「地域SNSは、地域における人と人のつながりを深めるとともに、地域の枠を越えた人的交流の輪を広げていく役割も果たしている。全国各地における地域SNSをきっかけとしたリアルな地域間交流の事例を紹介しながら、地域SNS間連携の可能性について議論を深める。」

第三分科会「地域SNSと電子地域通貨の連携」では、「地域通貨の先進事例をもとに、地域通貨を生かした地域活性化方策について議論するとともに、地域SNSと連携した電子地域通貨の可能性を探る」となっている。

【2. 地域SNSとはなにか】

SNSとは、ウェブ上のソーシャル・ネットワーキング・サービスであり、ユーザー数1,300万人の超巨大SNSのmixiが有名で、20歳台の若者では6,7割がやっているとのことである。地域SNSとは誤解を恐れず言えば、地域ごとにつくられたmixiの小型版のようなものといえる。その最初は、熊本県八代市の「ごろっとやっちろ」であり、最大規模のものは福岡県の「VARRY」の6000人、全国に約270のSNSが立ち上がっているといわれている。総務省の実証実験も、千代田区と長岡市で実施された。

SNSの主な機能は、掲示板、日記の作成やコメントの書き込み、あしあと（アクセス）履歴、コミュニティ（グループ）作成とトピックス（掲示板）作成、写真付きメッセージ（個

別のメール)、Google マップや YouTube 動画などの表示、友人紹介など、双方向の情報交換、交流のための仕掛けが満載されている。

ブログなどネットの世界では、特にわが国の場合、匿名が普通であり、時にはサイトの炎上などのリスクがある。SNS が急速に普及したのは、アクセスしたりコメントを書いた人がおおよそどんな人か分かるという点で、ほんの少しの安心感があったからである。しかし、その安心感も超巨大化することによって失われつつある。

そこで、地域密着型 SNS が登場することとなり、おおよそ地域を限定することによって、顔の見える範囲での安心感のある SNS となる、また、同時に 1. 招待制、2. 実名登録制度、3. 後見人制度などを原則とすると一挙に安心感が高まる。

全国フォーラムでも、「地域 SNS は交換日記と掲示板」という井戸兵庫県知事の発言に、牧慎太郎兵庫県企画管理部長が「知事には（地域 SNS 内の）トモダチが二人しかいないから（まだよくわかっていない）」と反論。これには場内大爆笑。

地域 SNS とはどんなものかということについては、「時空を超えた井戸端会議」(牧部長)、「ネット上の遊べる公園」(ごろっとやっちろの開発者、小林隆生さん)、「たかがツール」「されどツール」文献 1p. 12、「<場>メディア」「プラットフォーム」「・・・リアルなまちを映し出す、まちの一部そのもの」文献 1p. 53・・・といわれている。

で、結局のところ地域 SNS とは、ウェブ上の居場所・・・遊び場、交換日記、同好会、辻説法する街角、ブレインストーミングの会議場、ボーッとくつろげる場所・・・休んだり、動いたり、遊んだり、働いたり、いろんなことが出来て、それが許されるウェブ上の居場所なのではないか。これがリアルのまちづくりに如何なる効果をもたらすのかが、次に問われることとなる。

【3. 地域 SNS あれこれ】

当日、印象的だった地域 SNS をいくつか取り上げ紹介する。

最も、存在感を示したのは、もちろんご当地兵庫県の「ひよこむ」。この全国フォーラムの企画者側として、裏方として、又出演者として大活躍であった。ユーザー数は当日で 2,800 人に達していた。

三田市「さんでい」は、立ち上げて一ヶ月だったがオフ会最重視型 SNS と自己規定している。オフ会 (= 飲み会) をこれまで 10 回以上やっているとのことである。これは我が「けいはんな」でも是非マネしなければと思った。

なんと高校生が商店街の活性化でがんばっている伊丹の「いたまち SNS」は高校の先生がリーダーだった。

紙メディアも使う宇治の「お茶っ人」は 1000 人規模に達していた。会場でお茶を振る舞い、また交流会には平安調の着物で笛吹いて現れるパフォーマンス。とにかく元気だった。

普及委員会を作り 6000 人にまでなった福岡の VARRY (ベイリイ) は体育会系の SNS。そ

うすると「ひよこむ」はグルメ系 SNS となるか。

高齢者むけ「いきがい.c.c」の年間運営経費は1万円だそうだ。

私が代表をやっている「けいはんな地域 SNS お試し版」は、当日で会員60人余の手作りタイプの SNS であり、小ささ、可愛らしさで目立っていた。

会場のロビーでは、ポスターセッションが店開きされ、大賑わい。ウェブ上で名前を知っている人と出会い、名刺交換。初対面の人にも、その場で名刺にハンドルネームを書いて交換。その後のウェブ上の付き合いの始まりである。

VARRY の温泉太郎さんと房州わんだららんのソーメイさんにそれぞれの SNS にその場でログインして色々解説してもらおう。ポスターの前に各々各一台 PC が置かれ、ネットに繋がっているの、すぐに実演できる。

VARRY では、いわば優良コミュを「公認コミュ」としてお墨付きを与えている。また企業がコミュを立ち上げている。

房州わんだららんどではカーナビと SNS の連携のシステムを日産(?) とつくっている。これもブレイクしそうである。

このように、地域 SNS は、行政主導のもの、まったくの市民主導のもの。数千人から数十人まで規模もバラバラ。その得意とするジャンルも多種多様。まちづくり同様、そこにしかない地域 SNS が百花繚乱の様であった。

【4. 全体会】(注3)

それぞれの発言、印象的な言葉を記録しておく。

『地域 SNS は地域コミュニティを活性化するのか? コミュニティの com とは、複数の人が同じものを共有すること、個人が社会になるということ』になる。「HP からブログになり、芋づる式となった。そして SNS は人間関係を繋げ、深める役割をもっている。」(学習院大学 遠藤薫教授)

ひよこむの場合、居心地の良さからいうと「1000 人が一つのターニングポイント」であった。地域 SNS には「心地よい閉鎖性」があり、これが人をひきつける。『地域で SNS を動かすと、自発した人がどんどんつながる。地域 SNS は地域力を覚醒させる』(ひよこむ代表、和崎宏=こたつねこ)

知事は「SNS は単なる掲示板」と言ったが、そうではなく、地域 SNS は「いわば寄り合い」であり、また「どこでもドア」である。『信用問題については、衆人環視によって淘汰される。地域 SNS でつながっている人々のあいだには「地域マインド」が生まれる。日記交換、公開掲示板を越えるものが出来る』(岡田真美子兵庫県立大教授=ひよこ)

「個人をノードとする複層的なコミュニティ」「円は縁を切るときに使うが、地域通貨は助け合いを促進するために使う」「ひよこむには存在さえも見えないステルスコミュがあり、そこで重要なことは話し合う」「コミュは閉じないと成立しないが、閉じると行き詰る」「人は自分への反応が一番気になる存在であり、これが人間の本能である。SNS が広がっている

要因だろう」「誰でもヒーローになれるのが SNS」（前出、牧部長＝百山紀行）

【5. 第一分科会】・・・地域 SNS が人と人を結びつけコミュニティを押し上げる力、

「オープンなブログやサイトでマスコミの関心を引く。マスコミの取材はリアルが求められる。リアルなイベントをあっという間に実現するのは地域 SNS が得意とするところ」「食が人を繋ぐ」（前川裕司）姫路おでんというご当地グルメでまちおこしをすすめている。

「リアルから始まり、地域 SNS へ至り、次に SNS でリアルを作る」「（まちづくり人は忙しいので）SNS で会議ができる。SNS は時間を作ってくれる」ことになる。「communication で大事なものは、発信よりむしろ受信。受け手が大事だと思い受け止めてくれること。情報の意味は、発信者ではなく受け手が作る」（立木茂雄同志社大教授）

「自分を高め、暮らしを高め、社会貢献する、すなわち生活の質を高めるお手伝いをする」（三村園美）という生活創造活動コーディネータという兵庫県職員の業務が、ひよこむによって大きく飛躍している。

【6. 地域間交流（第二分科会）】・・・ひよこむでつながる他地域という実感

実は第二分科会には出ていないが、地域間交流については、この全国フォーラムに参加することによって、実感している。リアルに名刺を交換し、ポスターの前の PC でお互いの SNS を見せ合い、その後ひよこむ上でオトモダチになり、またはそれぞれの SNS に招待しあう、そんなことが私の周りでも、他の人の周りでも、起こっている。つまりある地域 SNS をハブとした人的なネットワークがあっという間に出来上がるのである。

リアルまちづくりでも、そのまちづくりが進むと、他の地域のキーパーソンとの出会い、つながり、ネットワークができる。時には海外とのネットワークも出来たりする。これと同様のことがここでも起こる。中身が豊かになると、情報があふれ出す、そして外からの情報も集まってくる。

同様に、SNS 自身のパワーが高まると、人と情報が行き交うのである。盛り上がるのがお得意の SNS の世界で、人と情報のパワーが渦を巻き、あたかも竜巻のようになるのである。

【7. 地域通貨と地域 SNS の驚くべき関係（第三分科会）】・・・「ひよこボ」の経験から

最初は関係が分からなかった。私も以前別の機会で、地域通貨を見聞きする経験があり（たとえば玉川まちづくりハウスの田（デン）、釜ヶ崎のカマ）、また自分自身もあるイベントで地域通貨をやったことがあるが、そんな私でさえ最初は地域 SNS との関係がほとんどイメージできなかった。しかし、やってみてこれは良いと得心している。

全国フォーラムで、ひよこむ上で使えるひよこむポイント略称ひよこボを使う機会が設けられていた。私はいつのまにか「170 ひよこボ」を持っていた。それは、ひよこむへ 3 人招待したということに対して、ひよこむへの貢献ということで運営者からのプレゼント

150 ひよこポと、ひよこむに訪問調査に行ったことに対するこたつねさんからのお礼の20 ひよこポだった。うれしかったら、個人的にひよこポを贈呈したりするのである。

どうやって使うのか分からなかったが、会場に手形が置いてあり、それでリアルな商品を買う。自分のハンドルネームと商品の値段、相手のハンドルネームを手形と控えに書いて、手形を渡す。私は、ばあやさんの桃ジャムと、夢工房さんの蕎麦と、マササンのせんべいを買った。それぞれ10ひよこポだった。円に直すと500円ぐらいだろうか。為替レートは明らかにされていない。

後日、ひよこむ上で相手に振り込む。値段は10ひよこポだったが、美味しかったので、おまけに5ひよこポをつけたりして、「美味しかったです」などと感想のメッセージをつけた。そうすると、お礼のメッセージをいただいたり、トモダチ依頼をいただいたり、関係が深まるのである。これは使える。お蕎麦を食べながら、夢工房さんの笑顔を思い出したりする。そうすると、一層お蕎麦がおいしくなる。楽しい思い出が、実に美味しい。

人と人を結びつけ、ありがとう、どういたしましての関係をどんどん進めていくのに、地域SNSと地域通貨は車の両輪のように機能することが分かった。

百山紀行さんの「円は縁を切るときに使うが、地域通貨は助け合いを促進するために使う」を実感したのである。

【8. 交流会】熱気あふれる会場

ここここで名刺交換、記念写真、談笑の輪が広がる。八戸の「はちみ一つ」の方々をはじめ鯖、イカをその場で切って出してくれた。

初対面でもすぐに打ち解けて、昔からの友人のように話ができた。そんな今回の全国フォーラムによく似た経験を以前にもしたことがある。1990年代中ごろのワクワクワークショップ全国交流会である。これも口コミだけで全国から手弁当で500人ほど集まり、ものすごい盛り上がりであったのである。こりゃ、世の中変わるよなと実感したのであったが、あれはその後どこに行ったのであろうか。

【9. 地域SNSはまちづくりの第三のツールとなるか】

市民まちづくりは、1980年代にワークショップ、90年代にNPOというツールを手に入れ、そして21世紀になって、地域SNSという第三のツールを手に入れたとあってよい。第三のステージへジャンプだ。この日は、歴史的な一日だったと後世に言い伝えられるに違いない。

しかし、気になったことはまちづくり系がほとんどいなかったことである。木原勝彬さんぐらいであろうか、私の旧知のまちづくり人は。私の仲間の神戸のまちづくり系の人々、県のまちづくり系の人々も全然いなかった。福祉系、環境系も私が見たところいなかったようである。

まちおこし、村おこし、地域振興系、地域情報系の人たちが集っていた。ようするに、

集まった行政マンや専門家達についていうと、総務省系の人たちが中心で、国交省系、厚労省系のひとたちはいないということか。市民レベルでは、役所の縦割りは関係ないはずだが、微妙に影響を受けている気がする。この辺りが課題であるが、発想を変えるとチャンスともいえる。ここに大きなパイプをつなげると、なんだか爆発的な化学反応が起こるのではないかと思えるのである。

【10. 自分の住んでいるまちで地域 SNS をどう展開するか】

前述したように、私は自分が住んでいる「けいはんな学研都市」とよばれる地域で、「けいはんな地域 SNS お試し版」というものを立ち上げつつある。けいはんなのまちづくりを考える会、まちづくりと Web2.0 研究会、けいはんな学研都市推進機構という、3 団体の有志によって構成される「けいはんな地域 SNS 研究会」が運営主体である。けいはんなの地域に何らかのかかわりがあり、かつリアルな友人知人に限定して 100 人まで会員を増やし、その後正式発足しようと考え、現在 102 名に達している。この間、超巨大 SNS とは一味も二味も違う地域 SNS ならではの良さを実感している。それは安心感とともに、リアルの人間関係のほどよい深まりであり、オフ会などのリアルなイベントを盛り上げる効果もある。また、ある保育園を守ろうという運動に対して、この SNS の場を提供しており、こうしたスピードと盛り上がりが瞬時に求められる地域限定の運動にもってこいのツールであることを実感している。

単なる交換日記と公開掲示板に留まらない大きな可能性を持っているとあってよい。

ハードとソフトの条件を整備し、SNS の名前を決め、本稿が出ている頃には、首尾よく正式発足していると胸を張っていたいものだと思う。

注 1：岡田藍ブログ「イラスト日記」より

<http://aiaiblog.jugem.jp/?day=20070904>

注 2：全国フォーラム公式サイト <http://www.bb.banban.jp/hyogo/>

注 3：『』は「せいちゃんさんの日記」in ひよこむから

文献 1：『地域 SNS 最前線 ソーシャル・ネットワーキング・サービス』庄司昌彦、三浦伸也、須子善彦、和崎宏著、ASCII、2007、4